

# 沖縄米軍基地問題で思うこと

福井 崇時

名古屋大学名誉教授 2010.07.19.

沖縄戦そして占領米軍から沖縄県人が受けた心身の苦痛は、人の心の痛みや身体四肢の疼痛と同じく、言葉で説明されても当事者と同じ経験をした者でなければその実際や度合いは判るものではない。内地は焼夷弾や爆弾でどの町も焼け死傷者も多数だったが沖縄県人の苦しみには及ばないと言えるだろう。数百万の兵士と沖縄、広島、長崎の人達の犠牲の上に 8 月 15 日を迎え、その後、半世紀余を過ぎた今なお、沖縄は鳩山前首相が迷走した基地により苦難を強いられている。それを軽減し解決する方策を真剣に考えて欲しく常々沖縄について思っていることを記したい。

日本本土、内地、は敗戦後、安泰に過ごせた。沖縄は本土防衛の砦とされ国土で唯一の戦場となった。本島は昭和 19 年 10 月 10 日午前 6 時半から午後 6 時過ぎまでの間、本土からの迎撃は一機も飛来せず、五波の大空襲に蹂躪され焼き尽くされた。11 月 17 日大本営は沖縄守備隊で最精鋭と言われていた第九師団を台湾へ転出させた\*<sup>1</sup>。米軍は昭和 20 年 3 月 27 日渡嘉敷島上陸、29 日に慶良間列島完全占領、4 月 1 日午前 8 時半渡具地海岸に上陸開始。以後熾烈な戦闘が繰り広げられ南部に追詰められた日本軍は摩文仁で 6 月 23 日午前 4 時半司令官牛島満中将と参謀長長勇中将が割腹自殺し組織的戦闘が終った。双方の軍人夫々七万人余、沖縄県人十四万人余の犠牲だった。米軍占領統治の日本南西諸島は外国となり、米本国の対共産圏政策にて、米軍は強権で一方的に土地を接收し基地を増強拡大した。軍人の暴行や犯罪行為、軍用機事故にも曝された。これらの苦痛や忍従と戦中戦後の悲惨な体験などは県や市の史誌及び沖縄タイムス社、琉球新報社等からの多数の出版書に縷々記録されている。

ポツダム宣言を受諾した日本政府は無傷で統治能力を保持し、地方の行政機関も機能していた。無条件降伏を受諾したのは陸海の軍隊で、日本国は天皇制維持等を含む条件降伏であった。大きな戦争をして負けた国の国土の殆どが敵国軍に占領されず、しかも開戦初期からの政府が無傷で存続し機能していたという敗戦国は過去には一例もない。国内の治安と日常生活秩序は保たれていた。交通機関も完全ではないが動いていた\*<sup>2</sup>。

日本国を占領、統治したのはマッカーサー将軍が率いる連合軍であるが、総司令部 GHQ/SCAP が発する命令、指令等は日本政府に伝達され、政府が公布施行する間接統治であった。米軍占領統治下の沖縄（奄美諸島も）には日本政府施政権は及ばなかった。ソ連のスターリンがドイツで行なった戦勝国による分割統治と同じように、北海道をソ連の統治下にすることを要求したが米国トルーマン大統領は即座にそれを拒否し、連合軍にソ連軍隊を参加させなかった。マッカーサー将軍の政策の一つは、日本内地へは英国軍も豪州軍も、軍人は実戦経験がない新兵で編成した軍隊を進駐させたことである\*<sup>3</sup>。

米国では真珠湾が攻撃された翌年 1942 年 3 月初旬に「外交問題評議会」を開き、勝つと仮定して、どのような原則で日本に平和を求めたらよいか、軍隊に対する処置、戦後日本の内政等の検討を始めている\*<sup>4</sup>。戦争末期にはポツダム宣言の前にヤルタとカイロで会談をして、連合国が行なう戦後政策に対する準備が周到に行なわれていた。戦争へ突入し無策のままに国を滅ぼした東条政府の行為とは根底から違うことを思い知らされた。

沖縄の米軍基地は 1946 年に始まった冷戦、1950 年 6 月 25 日に勃発した朝鮮戦争、1951 年

9月8日にサンフランシスコ平和条約と同日に日米間で締結された二国間の安全保障条約、1960年6月新安保と言われる日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約に応じた強化拡充されてゆく。1962年10月のキューバ危機、米ソ両国は核戦争瀬戸際にまで緊張した。欧州でも核戦争を覚悟する事態となった\*<sup>5</sup>。臨戦態勢に入った米軍が核武装した艦船や爆撃機を内地や沖縄の基地に配備したであろうことは想像できる。10月28日一転してソ連フルシチョフ首相の決断で戦争は回避された。その後も米国は対共産圏対策を続け1965年2月から北ヴェトナムへの爆撃が恒常化する。北爆は沖縄基地から発進している。1969年11月佐藤・ニクソン会談で沖縄の本土並み返還が合意され、1971年6月17日に返還協定が調印された。しかし米軍基地は日米安保条約による提供施設として存続することとなった。

私は海洋博開催中の1975年12月、琉球大学に転勤していた名大物理、物性理論研究室出身の丹慶勝市君の計らいで一週間の集中講義に行った。大学は首里城跡の丘の上、守禮之門の先にあった。二度目は名大学生部の厚生課長山影繁夫氏が琉球大学学生部次長となって栄転されたので1983年1月に彼を訪ねて那覇へ行った。大学は西原新キャンパスに移っていた。その時に国際通り牧志の書店で沖縄戦や住民が戦闘に巻き込まれた記録などの出版書を幾冊か購入した。三度目は1995年に**平和の礎**が完成した知らせを受けて首里で戦死している兄の名前の確認を兼ねて戦跡等を再再度訪ねるため10月に行った。それ以後も数回訪れている。

1983年に行った時、誰だったかに聞いた話を書く。彼曰く「昔、西から明が来て属国となり、徳川の時東から薩摩が来て重税を課した\*<sup>6</sup>。明治になり良くなるかと期待されたが、皇民化の名の元に標準語使用の強制で苦しめられた。戦争では本土の防波堤となり老若男女全島民は塗炭の苦しみを強いられた。敗戦後は占領米軍のなすが儘の統治で土地は取り上げられ、軍票が通貨となりしばらくすると米ドルとなり生活は米国式となった。本土復帰で米ドルから日本円になると端数切り上げで物価は高くなり、軍からの色々な安い放出物品が買えなくなった。米軍基地は全然本土へは移転せず、反対に本土から押しつけ基地が来た。軍人の暴行や交通事故も全く減らない。本土復帰は良かったかどうか疑問だ」と。

日本国は平和憲法の元、自らは武力を持たない代わりに、安全保障という米国の武力、核を含む、の傘の下に居る代償として米軍基地を国内に持つことを約束した。本来国内に分散して然るべき基地だが沖縄が20年以上も米軍の占領下にあったから基地が狭い沖縄に集中して建設されている。内地の都道府県は沖縄の本土復帰後の40年間、自ら進んでこの異常さを解消しようと声を上げた知事はいない。反対に基地が来ることを拒否すると言っている。鳩山前首相が知事会で基地受入れを要請した時、大阪の橋下知事独りが諾と声を上げたが殆どの知事は非を唱えたか無言だった大変悲しい事態を見た。徳之島では高校生に基地が来るのは反対だと発言させている。安保体制下の今の基地問題と安保を否定し基地撤去を言う次元が違う主張とを混同した発言である。学校で日本現代史を教えていないのかもしれない。沖縄や日本本土、徳之島も、が日米安保体制下でどのように人々は生きてきたかを、米軍基地がどのようなことから、どのように作られどのように変遷して来たかを、そして基地は沖縄だけに押し付けてはならず国全体で分担受け持つべきであることを是非認識して欲しい。

外交では首相は確実に裏付けされた政策で相手国の担当者や長との人間的信頼関係を構築すべきだが、悲しいかな最近の首相は短期間で交代して信頼を裏切る始末である。国内向けに耳障りの良いことを言っている外交の場でその事が相手に通じるとは思えない。米政府の行為は問題毎に長期間連続して取り組んでいる専門家集団が方針を提案し委員会で検討して決定されている。このような確固たる知識と手段とを与えられている相手に対する日本の当事者は官僚のベテランは別として経験が浅く知識が少なく対人関係も希薄な政治家であるからどこまで太刀打ちできるか大いに疑問である。知恵の集団を背後に持ち確固たる将来への見通しと強固な信念と哲学とを持つ強い政治力のある首相が率いる長期政権の出現を望むこと切なりである。

現在の沖縄を理解するのによい本がある 著者は石川県金沢市生まれで法政大法学部卒後、琉球新報社入社、東京総局勤務後、米軍統治下の那覇本社に転属し以後の40年間を沖縄で記者として過ごした「内と外」との眼を持つ野里洋著「癒しの島、沖縄の真実」ソフトバンク新書032 2007年2月26日発行ソフトバンク クリエイティブ(株)

また、記憶をいかに継承するかと現代の沖縄若者が当事者性の身体化へと取り組んでいる屋嘉比収やかびおさむ著「沖縄戦、米軍占領史を学びなおす」世織書房、横浜、2009年10月30日も勧めする

戦後の沖縄に深く関わっている私の中学校時代の友人から勧められたのは、400年の歴史をさかのぼって現在に至る沖縄の姿をまとめたNHK テレビ「歴史は眠らない」の7月の放映番組「沖縄・日本400年」小森陽一、テキストあり である 日本史の中での沖縄が詳しく説明されている

## 註

\* 1 精鋭部隊や優秀な人材を温存する配慮で、戦死確実の戦線へ送らず安全な地へ移動させている戦艦大和が沖縄へ出撃する直前に温存すべき人材を多数下艦、交替させている 米国でもルーズベルト大統領は日本軍の攻撃情報を持っていて老朽戦艦を真珠湾に停泊させ殆どの軍人を陸に上げ、新造航空母艦2隻は遙かに離れた海上に避難させておいた 大統領は日本軍の攻撃で国内世論を喚起し戦争容認に傾け議会を軍艦新造予算承認へ導いた 真珠湾は浅いから破壊された戦艦は容易く修理され艦隊復帰した 沖縄守備隊の参謀長長少将はノモンハンの作戦大失敗の責任清算の意で戦死必死の沖縄戦線へ配属された 丙種で社会人だった兄達が補充兵として大阪の連隊に招集され一個大隊に編成後、12月に那覇に派遣され守備隊本体ではなく司令部直屬部隊に合流している

\* 2 阪大理学部物理学教室の一部が疎開していた岡山県の井原へ輸送すべく大阪駅荷物掛りに8月15日、天皇の敗戦宣言放送の最中に持ち込まれた数個の荷物は無事に井原に到着している

\* 3 敗戦後の11月に阪大のサイクロトロンを接收に来た米軍の分隊長(人懐っこいマサチューセッツ州スプリングフィールドのカレッジ出身)が云うには、自分は予備役だったが招集されカリフォルニア州の基地に入隊し新兵達で部隊が編成され、一ヶ月ほどの基礎訓練後、サンフランシスコより輸送船で和歌山へ、そして大阪の駐屯地へ来た 兵士達は真新しい軍服でぎごちない動作だった

私は1962年7月からスイス、ジュネーヴの欧州原子核研究機構、CERN、セルン、の研究員になり暫くして親しくなった英国ウェールズ出身の技師(後に大型水素泡箱装置の技術主任)は新兵軍人として広島の大竹に進駐し、其処で奄美出身の女性と親しくなり除隊後に結婚した 子供は一男二女、女兒の名前は日本の花だった 彼の父親は柔道を教えていると言っていた

私は1963年10月下旬からシカゴ大学フェルミ研究所でアンダーソン博士の実験を手伝うのだが、グループの技師や研究所の技師達は九州の雁ノ巣飛行場や横須賀基地に居ったと云う いずれも戦争を知らぬ戦後に入隊した軍人である

\* 4 ヒュー・ボートン Hugh BORTON 著 「戦後日本の設計者 ボートン回想録」五味俊樹訳 監修 五百旗頭眞イオキベマコト 朝日新聞社 1998年3月5日 発行

\* 5 1962年夏からセルンの研究員になっていた私はジュネーヴ市内のアパートに家族と共に住んでいた 10月下旬、アパート近くの現在で言うスーパーショップ、ミグロス、の小さな店に連日市民が次から次と腕一杯の袋を抱えて出て来る光景を眺めていた ジュネーヴはフランス語圏なので言葉に慣れない私共は、キューバにソ連のミサイル基地建設、U-2偵察機撃墜、キューバへ向かうソ連輸送船団、両国は核戦争一步手前の緊迫という状況は研究所へパリから送られて来る英字新聞で判っていたが、何故ジュネーヴ市民があのような行動をしているのかと言う事は全く判らなかった 研究所で研究グループの友人に説明をしてもらった スイス連邦政府は各州、カントン、政府を通じて国民に呼びかけて、もし戦争となっても連邦政府は必ず3ヶ月までに国民に対応できるよう国の態勢を整えるから、各家庭はその間を生き延びるだけのバター、砂糖、缶詰食料等を確保して欲しい、此れ等の品は十分に用意されていて価格が高くなることはないという通知であった そのようなこととは露知らず、領事館からの情報もなく、我が家は何の準備もせずに10月28日を迎えた アパートの隣人や研究所の者達は一斉にフルシヨフ首相の決断に感謝すると言っていた 後日、研究グループのドイツ人から聞いた話は、ドイツでは核戦争の準備として市民にパンフレットを配布し原爆への対応を説明した そのパンフレットには「外出を控えること、外出時には白いシーツを携行すること、敵機を見たらシーツを頭から被り道に伏せること、鞆を持っておれば開いて頭に乗せよ」と書いてあったとのこと 当時の欧州の国々での原爆についての認識の程度が判る話である 日本はもっと真剣に広島長崎被爆の実態を世界に発信すべきだと痛感した グループの連中に被爆の実態を説明しドイツ政府が配布したパンフレットの記述が噴飯ものだと言ってもどの程度認識されたか疑問である

\* 6 宮古島へ行く機会があった そこには人頭税石と言うのがあって島人の説明によると、この高さ約140センチの石柱より子供の背丈が高くなると薩摩藩に人頭税を払わされる過酷な課税だったとのことである